

公益法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2015 年度（後期）一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

「一般住民に対しての在宅医療のイメージを高めるための
絵本の制作およびその効果に関する研究」

申請者：阿部泰之
所属機関：旭川医科大学病院 緩和ケア診療部
提出年月日：平成29年3月29日

1. 背景

超高齢化社会を迎える我が国において、在宅医療を推進していく必要性は高まっている。それは、療養場所が物理的に不足するという問題だけではなく、例えば、癌患者において在宅死よりも病院死で QOL が増悪し、介護者のメンタルヘルスが増悪するという報告¹⁾もあり、在宅医療のほうが病院医療よりも優れている点があることが示されている。

また、療養の場所、最期を迎える場所として、自宅という選択肢の一般認識は高まっている。例えば、厚生労働省調査「終末期医療に関する調査」において、終末期の療養場所に関する希望を、平成 10 年、15 年、20 年と追ってみると、自宅で療養して、必要になれば医療機関等を利用したいと回答した者の割合を合わせると、平成 10 年：57.7%、平成 15 年：58.8%、平成 20 年：63.3%となっており、「自宅で療養したい」人の割合は増加している。しかし、そうした希望があっても、実際に在宅医療を選択する人はまだ少ないことが指摘されている。

いくつかの在宅医療に関する住民の意識調査²⁾ ³⁾ をみると、在宅でどのような医療が受けられるかわからない、訪問看護でどのようなサービスが受けられるかわからない、といった、在宅医療に関してそもそもイメージが湧かないということや、お金や家族の精神的負担の危惧、在宅で環境が整えられるのか心配といった、実情がわからないことへの不安があがっている。このことは、在宅医療を推進していくにあたって、医療側の体制整備だけではなく、現在医療を受けている患者や、将来医療の受け手となる可能性のある一般住民の在宅医療のイメージが高まることが重要であることを示唆している。

2. 目的

ある事柄のイメージを高めるにはいくつかの方法があると思われるが、今回は、情緒を含んだイメージを伝えやすい「絵本」を媒体として、在宅医療のあるべきイメージを伝える資料開発を思い立った。医療において絵本を活用する取り組みにはいくつかの報告がある。平林⁴⁾ は、障がい児と健常児の相互理解を促すために、障がいを理解するための絵本を制作し、現場で読み聞かせを行った。その結果、障がいの理解が進み、当事者同士が歩み寄れたのは保護者のほうであったという。このように、絵本は子どもに対してだけではなく、大人に対しても、物事の「イメージ」を伝えるのに有効な方法である。

すなわち、この研究の目的は、在宅医療を一般住民に知ってもらうための絵本を作成することである。

3. 方法

以下の 3 期で計画する。

第1期：小学生による在宅医療体験

体験した小学生が感想文を記載する。

第2期：絵本製作

在宅医療体験の感想文の言葉、見解を引用しながら、在宅医療に関する「イメージ」を伝える絵本を制作する。

制作された絵本は、日本図書館協会を通じて、全国の公共図書館へ配布する。また、旭川市内の小中学校へ配布する。

第3期：調査用紙の質的分析

制作された絵本を旭川市立中央図書館で読み聞かせを行い、読み聞かせ後の感想を質問紙に書いてもらい、質的に分析する。

分析は2名の研究者がSCAT(Steps for Coding and Theorization)^{5) 6)}を用いて独立して分析し、概念を抽出する。

4. 結果

小学生の在宅医療体験を2016年7月25,26,28日、8月2日に行った。

旭川市内の小学3-6年生8名が14件の在宅医療を体験した。

8名から感想文の提出を受けた。

同感想文を参照しながら、タイトル「しょうらいの夢」となる絵本を製作し、全国3073か所の公共図書館へ配布した。また、旭川市内の小中学校84か所へ配布した。

同絵本を用いて2017年3月18日に旭川市中央図書館において一般住民に対して読み聞かせを行った。15名が参加し、アンケート用紙は12名から回収した。

読み聞かせの前後のアンケート(12名分)をSCATを用いて2名の研究者が独立して内容分析を行い、擦り合わせを行った。

その結果、事前アンケートからは12個の概念、事後アンケートからは10個の概念が抽出された。抽出概念を用いたストーリーラインを以下に記述する。

【在宅医療の事前イメージ】

一般の在宅医療に関する事前イメージとして、ホスピタリティがあり、平穏な時間を家族と過ごすことができるなどの良いイメージを持っている人が多く、目指すべき医療の形であるとまで考えている人もいる。しかし、在宅で過ごすには医療機器を使うなど、医療が不可欠であり、また、家族の介護力がなければ達成されないといったハードルの高さを感じてもいて、達成・持続不可能な仕組みであると考えている人もいる。また一方で、在宅＝高齢者とステレオタイプなイメージを持っていたり、今まで触れたことがなく、まだまだ一般に対する情報自体が不足していることも判明した。

【絵本読み聞かせ後の在宅医療のイメージ】

読み聞かせ後の在宅医療のイメージとして、心のケアとなること、自分らしくいれる場所であること、自宅にいるのは理想であることをイメージされた人が多かった。また、絵本によって、在宅医療の理解が進んだ人もいた。一方で、(在宅医療は理想ではあるものの)、とりわけ長期間になると家族が大変であり、現実には難しいものであるというイメージは残っていた。また、絵本によってイメージが変わることはない、絵本はきれいなところばかりで現実とかい離しているという少数意見もあった。さらに、絵本は子供の読むものというイメージも根強かった。

5. 考察

在宅医療のイメージを伝える絵本を製作し、読み聞かせることで、そのイメージがどう変化するかを分析した。一般の人の在宅医療のイメージとして、穏やかな優しいイメージをもともと持っているが、一方でハードルの高さも感じていた。絵本を読み聞かせることにより、その漠然としたイメージが、心のケアや自分らしくいれる場所といった言葉に置き換えられており、具体性が高まった可能性がある。しかし、家族が大変であるというイメージは根強く残っており、実際に在宅医療を利用する際のハードルは下がっていない可能性がある。また、絵本という媒体がもともと持つ「子供向け」というイメージは、一般に向けてコンテンツを広げる際の壁になることがわかった。

6. 結語

一般住民に対して、在宅医療のイメージを高めるための絵本を製作した。製作した絵本を一般住民に読み聞かせることにより、在宅医療のイメージがどう変化するかを、読み聞かせ前後の質問紙を用いて質的に分析した。良いイメージが高まった部分と、根強く変わらないイメージがあることが判明した。

絵本は在宅医療のイメージを高めるためのひとつの方策に位置付けられる。

謝辞

本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の2015年度(後期)一般公募「在宅医療研究への助成」を受けて行われた。

7. 文献

- 1) Wright AA, Keating NL, Balboni TA, et al. Place of death: correlations with quality of life of patients with cancer and predictors of bereaved caregivers' mental health. *J Clin Oncol* 2010;28 (29) :4457-64.

- 2) 大分市「在宅医療と介護に関するアンケート調査（市民意識調査）」報告書
<http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1430116321708/files/houkokusyo.pdf>
- 3) 豊川市在宅医療に関するアンケート調査報告書
<http://www.city.toyokawa.lg.jp/kurashi/fukushikaigo/koreishafukushi/kaigokoreika20150109.files/siminanke-to.pdf>
- 4) 平林あゆ子：障がいを理解するための「絵本」制作の試み(第5報) 基本概念と「絵本」の効果および評価について 名古屋女子大学紀要（家政・自然編、人文・社会編）57：p197-208；2011
- 5) 大谷尚. SCAT:Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学 2011; 10:155-60.
- 6) 大谷尚. 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データに適用可能な理論家の手続き. 名古屋大院教発達科研科紀 2008; 54: 27-44.